



看護の原点はどこに

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

先日、ある看護学校からの依頼で動物世界の切り口で「いのち」にまつわる話をした。動物園人に何ができるか悩みつつ、看護師を志す学生に対し自身の看護師さんから受けた経験を思い出し「パーパスフルタッチ：いのちのふれあいにその原点を探る」の演題で話をした。

看護の仕事には、医療現場での様々な知識や技術を身につけることは無論不可欠だろうが、看護の原点である相手を思いやる心を養っていく努力も忘れてはならない。大事なはそのバランスなのだろう。

看護とはおよそ縁遠そうな自然史的な視点で動物のいのちのつながりをながめながら、動物園の動物たちが見せてくれる子育てなどの生き様、動物親子や家族のふれ合いの事例などで話を構成してみた。

ところで、私は幸いにも親からもらった身体のおかげでこれまで大病や大手術などを経験せずに生きてくることができたので、看護師さんのお世話になることは多くなかった。とは言うものの、それなりに年齢を重ねてきたのだから、医療や看護師さんには様々お世話になった経験はある。

いつも思い出すのは胃内視鏡検査時の看護師さんのことだ。検査時は誰しも不安と苦痛を味わい、身も心も硬直しがちになる。その時、看護師さんの柔和な笑顔と背中へのやさしい手当て、タッチングがいつも私を救ってくれ、苦痛

と不安は不思議に和らぐのだ。

看護行為のタッチングは苦痛や不安を和らげる目的（パーパス）で行われるものということになる。子どもが痛い目に遭った時、お母さんがやさしく、「大丈夫よ、フッフ、痛いの、痛いの、飛んで行け」と語りかけ、さすってもらった経験によく似る。看護師像は母親と重なる。

やさしさと柔らかなタッチングは交感神経の興奮を穏やかにし、逆に副交感神経を程よく刺激してくれるとも言われる。この行為は思いやりやいたわるといふ愛情で裏打ちされたものでもある。タッチングとはそもそも何なのか、そしてその原点はどこにあるのか、動物世界に探った。

動物は動くものだから物理的に様々なものと接触するわけだが、意図が伴うことで、ふれ合いに意味が出てくる。自然史上で動物のふれ合いに意味を持つようになったのは、約1億数千万年前の哺乳類が登場したあたりになる。爬虫類（恐竜も含め）時代のふれ合いには大した重要な意味がなかったが、お乳で子を育てる哺乳類の時代になると、ふれ合いは極めて重要な意味を持つようになった。子の生き死にに直結するからだ。哺乳類の子は、母とのふれ合いを通じてお乳をもらい、育ててもらわなければならない存在として生まれてくるのだ。母子の関係は神秘的な自然の仕掛けだ。

哺乳類の始まりは、偶然と必然の産物とも言

える。原始哺乳類は爬虫類の恐竜全盛時代、日中には物陰でひっそりと生き、恐竜が低体温で動きづらくなる寒い夜間に活動していたようだ。そのため体温を一定に維持する必要があり毛を発達させた、「毛もの（獣）」になった。大事な毛のケアに皮脂腺を毛根に発達させ、体温調節のための汗腺も発達させた。毛ものにとって必然の産物であった。

これらの腺がなぜか乳腺に変化した。偶然にも三種の腺は解剖学的に同じアポクリン腺だ。ふれ合いの原点はお乳を飲ませる腺だった。

哺乳類の子は、親からお乳をもらい成育の確実性が高まった。そこには母が子を護るというケアの精神が伴い育まれた。それは子への愛、母性愛へと発展してゆく。母性は子とのふれ合い、すなわち皮膚感覚の中で成長してきたとも言える。

ふれ合う感覚、感情はしだいに高度になり脳機能の発達に結び付きながら、爬虫類にはなかった新脳（大脳皮質）が哺乳類で発達した。ふれ合い感じとる皮膚とその感覚を判断する大脳皮質は、発生学上で同じ外胚葉であることもそれを裏付けている。脳の発達とふれ合いは連鎖し合い高度な動物同士の関わりを育み社会生活へと発展、やがて助け合う動物、人間社会へとつながっていったに違いない。

母子関係は、母が子のめんどろを看て護り、子が母を慕い頼るという極めて自然に双方が反応し合うことで成立するが、看護行為も看護をする側、される側との関係性で成立するのではないだろうか。母子のふれ合いが愛着を育んでいくように、看護行為は看護や医療と患者を結び付ける大切なものである。看護行為としてパーパスフルタッチは弱った人、助けを求める人へ

の純粹、崇高で究極のふれ合いのようにも思えてくる。母子関係や看護行為は、決して一方通行ではないということを動物園の動物たちも教えてくれているようだ。

トナカイが子どもを産んだ時の母子関係である。初産で生まれた子は小さく弱弱しかった。親は子に懸命に愛情を注いだ、立てない子はお乳が飲めなかった。仕方なく飼育員が柵内に入り人工乳を与えた。その時、母は子から離れるのだった。飼育員が柵を出ると母は子にすぐ戻ってケアしたが、飼育員が柵内に入れば母は同じ態度を繰り返した。2日目の夕方には子は元気になり自分で立ちお乳を飲み始めた。3日目の朝、母の態度はガラッと変わった。飼育員が柵内で子に人工乳をあげようとしたら、子を守ろうと飼育員に攻撃的態度に変わったのだ。母の態度を変えたのは「お乳頂戴」という子の求めだった。

母子関係は母の子への愛情と子の母への求め、この二つが合わさるからうまく出来上がるのだ。ふれ合う両者でつくるのだ。

このことは看護行為にも通じるような真理、看護する側、看護を受ける側にもどこか通じるように思えてくる。病気などで弱り苦しんでいたとしても、患者は生きようとしているから、看護する側に何かのサインを送っているに違いない。看護する側はそのサインを察知するだろう。

三重障害を乗り越え生きたヘレン・ケラーの家庭教師としてやさしく指導したアン・サリヴァン女史は次のような言葉を残している。

Children require guidance and sympathy far more than instruction. 患者も求めているのはやさしさと導きであって、難しい講釈ではないのだろう。看護にも通じる名言だ。